

## りびんぐらいぶず 令和2(2020)年1月第2号

### 南無阿弥陀佛のお念仏の働き

#### ご讃題

釈尊は、煩惱成就の姿のままに苦悩の日暮らしを続けている私たちをそのままに救い、おさとの真実へ導こうと願われたのが阿弥陀如来であることを教えて下さいました。そして親鸞聖人は、この阿弥陀如来の願いが、南無阿弥陀佛のお念仏となって働き続けて下さっていることを明らかにされたのです。

二〇一九年一月九日 龍谷御門主 釈尊如 ご消息

(Ref 本願寺新報二〇一九年 一月九日号外)

#### はじめに

浄土真宗では、三業惑乱の長い歴史の下で「信心正因 称名報恩」のご法義があまりにも大きな影響を維持して参りました。

「信心正因」そのものは正しくとも、「信心獲得」を先行して頂戴せしめる構造が衆生に取り難解です。しかも「信前行後」の構造は親鸞聖人のみ教えではありません。

お念仏には、報恩感謝の要素がないわけではありませんが、お念仏を通して「聞名」が信心獲得プロセスにあって実践的に重要になるという構造が忘れ去られてきたからです。

これでは、プラクティカルに信心獲得を求める現代人の要請に応えることができませんし、海外で仏教を求めてやってくる異教徒異民族の求めにも対応することが出来ず、浄土真宗は、長い間、仏教各宗派の後塵を拝して来たという悲しい現実を来しています。

実は「聞名」については、学問的に研究が遅れ、教学構造として明確にされていません。

「聞名」は、お念仏を通してプラクティカルに実践的に体験できるのであり、「聞名」そのものが実は「信心獲得」という体験的事実であることを明確化しなくてはなりません。

「聞名」が信心獲得であることは親鸞聖人のみ教えそのものだったからです。

#### 宝石山正覚寺の基本方針と同行方針

このような本質的課題解決のために当院では早くから「基本方針」を公開し「同行方針」を掲げて取り組んで参りました。

#### 基本方針

私たちは、「聞名ループ」の理念に則り、仰せのままに称えれば直ちに聞こえて下さる如来様のお喚び声に喚び覚まされつつ、下記の通りの同行方針を掲げて社会に参画することを誓います。

## 同行方針

- 一、お聴聞を通じて和やかなコミュニティを実現します。
  - (ア)お聴聞はメディテーションに通ずることを“お聴聞の会”で体験します。
  - (イ)“ウェブサイト正覚寺”で人々の繋がりを実現します。
- 二、“ダーナ(布施)”(子供たちを育む他)を実践します。
- 三、宗門のリスクと機会への取り組みを継続実践します。
  - (ア)伝道最前線の活性化に取り組みます。
  - (イ)門徒推進員の誕生を切に念じます。
  - (ウ)無量寿経勉強会を継続実践します。
  - (エ)伝道教学を鍛え上げ見える化します。

(Ref 宝石山正覚寺の基本方針」と「同行方針」より)

## 基本方針解説

ご本願が成就された結果、第十七願と第十八願とは一連の成就文であることが明らかになりました。

その結果、第十七願は、親鸞聖人によって諸仏称名の願と標拳された通り、お念仏というのは、諸仏称名によりお名号を讃嘆なさる大行であることが明らかになったのです。

大行は阿弥陀如来から回向された大行ですから受けとめた諸仏如来は、これを称える大行を実践なさったのです。

大行そのものは阿弥陀如来の所産ですから、諸仏がお称えになるや否や諸仏の上に阿弥陀如来の大行が聞こえて下さることになり、諸仏はこれを聞名なさることになります。

この諸仏と同様に衆生も南無阿弥陀佛のお念仏となって聞こえて下さるお名号をお聞かせに与るのだということになります。

こうして衆生が最初にお聞かせに与るのは、諸仏如来の念佛による名号讃嘆であります。

大行をお聞かせ下さる諸仏如来は、他力の念仏者に通じますから、初めて他力の念仏者のお念仏をお聞かせに与った衆生は、大きな感動に包まれることになります。

聞其名号 信心歓喜の「歓喜」がこの事実を物語っています。

衆生は全く初めての体験として諸仏の念仏による名号讃嘆をお聞かせに与る。諸仏がお称え下さる讃嘆の念仏は、他力の念仏者の讃嘆のお念仏だったと云うことになります。

初めて讃嘆のお念仏を耳にして感動した衆生は、自らも又これに従って随念(付き従って)してお念仏したい気持ちにかられます。このときの随念の気持ちこそは、第十八願の「乃至十念」のお念仏だったのです。サンスクリットでは Anusmareyus と言われる御文であります。自らも又諸仏に習ってお念仏してみたい気持ちになって精神を集中してお念仏する姿です。このときのお念仏は静かな三昧(Meditation)と云われます。静かな三昧は、やがて精神を更に集中

するお念仏となって下さいます。これは、仏説阿弥陀経の「執持名号」に通じる「Manasikāra」であります。

お念仏の三昧は、一度ならずとも称えれば直ちに私という場の上に如来様の大行となって実現され、聞こえて下さる。

これが繰り返される間には、衆生の上には称えれば直ちに聞こえて下さる聞名が何度も繰り返し「聞名ループ」となって実現されることになるのであります。

(註) ここで“聞名ループ”とは、本願成就文の「聞其名号(聞名)」をめざして、頭を垂れて念仏すれば、それは如来様から手向けられた愚かな衆生にも許される讃仰の行になりますから、称えれば直ちに聞こえて下さる南無阿弥陀佛こそは、阿弥陀如来直々のお喚び声(本願招喚の勅命)に他ならなかったと受けとめる“智慧の念仏 / 信心の智慧”獲得のプロセスアプローチを指すことになります。

最初の聞名は諸仏如来(他力の念仏者)が讃嘆なさったお名号をお聞かせに与ることを意味します。御門主はこれを「阿弥陀如来の願いが、南無阿弥陀佛のお念仏となって働き続けていて下さっていると仰せ下さったのです。

御門主の御消息に初めて明確化された「南無阿弥陀佛のお念仏となって働き続けていて下さる」という御言葉を私たちは大切にしなければならないと思うのであります。

他力の念仏者が讃嘆なさるお念仏を聞名し、心洗われ、自らもまたこれに随念してお念仏するうちには、衆生は、終にお念仏を通してこれを聞名することになる。「聞名する」とは、「信心獲得」の別名に他ならなかったことになるのであります。合掌。

<p>仏教壮年会お聴聞の会 二月二日(日)二十時～ 仏教婦人会例会 二月十六日(日)十九時半～ 永代経&amp;前々坊守五十回忌十三時半～十五時半 077-596-0166, FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥 著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地 077-596-0166, FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------